【論文】

宮沢賢治文学における地学的想像力・補遺二題

―〈種山ヶ原〉〈鬼越山〉―

鈴木健司

「宮沢賢治文学における地学的想像力」というテーマのもと、「文学部紀要」を中心に十一本ほどの論文を継続的に書き、単行本『宮沢賢治文学における地学的想像力―〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる―』（蒼丘書林、二〇一一年）として上梓した。しかしその後、新たに書き足したいテーマがあらわれ、調査、研究を続けてきた。それがまとまったので、「補遺二題」として発表することにした。第一章は、〈種山ヶ原〉に関し、賢治の岩石認識に異なりのあることを明らかにした上で、それが、〈種山ヶ原〉の体験時期の異なりや、その体験で受けたイメージと深い関連があることを指摘し、そのことが賢治文学の想像力の展開を考える切り口になるのではないか、という主旨である。第二章は、賢治テクストにあっても実在しない〈鬼越山〉を取り上げ、これまで、〈鬼古里山〉を想定していた先行研究に対し、〈燧堀山〉こそが〈鬼越山〉に当たるのではないか、という新見解を提示し、立証する。

キーワード：宮沢賢治、種山ヶ原、鬼越山、地学、鬼古里山

第一章　〈種山ヶ原〉の岩石認識について

1―1　蛇紋岩

「種山ヶ原といふのは北上山地のまん中の高原で、青黒いつるつるの蛇紋岩や、硬い橄欖岩からできてゐます」。これは、童話「種山ヶ原」（推定成立期、大正一〇年頃）の冒頭の一文だが、種山ヶ原を物見山（別名・種山）周辺として解釈した場合、蛇紋岩や橄欖岩の存在しないことは、少しでも岩石に関する知識を持つ者であれば分かることである。また、地質図を見て

もよい。蛇紋岩があらわれているのは、種山ヶ原（「物見山」周辺）よりもずっと北側の五輪峠方面である。

また、水沢方面から種山ヶ原に向かう場合通過する、江刺の原体村を舞台とする詩「原体剣舞連（mental sketch modified）」（1922・8・31）にも、「蛇紋山地に篝（かがり）をかかげ」と蛇紋（岩）の表現を確認することができる。種山ヶ原以西に、蛇紋岩の露岩地帯がないわけではないが、原体村（現在の奥州市江刺区田原）付近は、地質的に蛇紋岩と無縁で新第三紀以後の堆積岩地帯である（稲瀬火山岩類層、または金沢層）。「蛇紋山地」という表現には明らかな無理があるといえるはずである。おそらく、「こんや銀河と森とのまつり／准平原の天末線に／さらにも強く鼓を鳴らし」とあることから、この詩は、たんに原体村の剣舞をモデルにしたのでなく、〈種山ヶ原〉高原全体を意識した全体構造のなかに立ち上げられたものであり、その結果として「蛇紋山地」という表現が選ばれたのだと思われる。

詩「原体剣舞連」は、作品成立時期が一九二二（大11）年となっているが、その年に〈種山ヶ原〉に行っているわけではない。原体験は、歌稿「大正六年七月より」に収められている短歌「上伊手剣舞連」四首、「原体剣舞連」二首に表現されたものと考えるべきであり、その短歌を発展させたものとみるのが一般的である。

1－2　黒玢岩（メラフイライアー）

歌稿「大正六年七月より」に収められている短歌「種山ヶ原　七首」の一つに、「目のあたり／黒雲立つとまがひしは黒玢岩（メラフイライアー）の露頭（メラフイライアー）なりけり」がある。地質・岩石を示す語彙として黒玢岩（メラフイライアー）を見いだすことができる。「黒玢岩（メラフイライアー）」とは聞きなれない岩石名だが、横山又次郎著『普通地質学講義』（冨山房、大3・7初版、大6・9三版所見）には、「斜長石、輝石、鉄鉱、燐灰石等の潜晶乃至斑紋状に聚合したもので、多くは黒色を帯び、又杏状の組織を呈することも極めて多い」と記述されている。横山は黒玢岩を「旧火山岩」に属すと見なしている。「旧火山」とは、第三紀より前の時期に流出したマグマ（火山岩）を意味する。それに対し、第三紀以後流出したものを「新火山」と呼んでいる。「旧火山」に分類される岩石は、通常、半深成岩に分類されるところだが、大正のころは半深成岩の

概念が成立してなかったようで、賢治が盛岡高等農林時代に作成に関わった「盛岡付近地質図」でも、「新火山」「深造岩」式の分類が見られる。横山は明確には述べていないが、「旧火山」の「黒玢岩」は「新火山」の玄武岩に対応すると判断していたようである。それに対し、玢岩であるが、「新火山」の安山岩に対応する「旧火山」の命名のようだ。同著には、玢岩は「暗赤褐色若くは他の色の潜晶質石基中、斜長石、角閃石、輝石、時に又黒雲母の結晶を散布する」と記述されている。

したがって、賢治にとって黒玢岩と玢岩は、「旧火山岩」における、塩基性岩と中性岩として区別されていたと考えられるだろう。童話「種山ヶ原」に記されていた蛇紋岩という岩石認識は、短歌「種山ヶ原」では黒玢岩（メラフィイヤー）ということになる。横山の著書によれば、「深成岩」の項目に「斑糲岩以下の諸岩が風化分解するとき蛇紋岩（メラフィイヤー）となる」と記されており、賢治にとって蛇紋岩と黒玢岩とは明確に区別されていたと思われる。「斑糲岩以下」とは書中「斑輝岩」「ノーライト」「橄欖岩」をさしている。

1－3　閃緑玢岩

詩「種山ヶ原」においては、また、異なる岩石が登場してくる。「閃緑玢岩」という岩石である。下書稿（一）最終形態から引用する。

三六八
種山と種山ヶ原　　一九二五、七、一九、

パート二

そしてこここそ高原の残丘（モナドノックス）
種山の尖端である
雨や炭酸風の試薬に溶け残り
苔から白く装はれた
巨きな二つの露岩である
わたくしはこの巨大な地殻の冷え堅まった動脈に
槌を加へて検べやう
おゝ角閃石斜長石　暗い石基と斑晶と
まさしく閃緑玢岩である
わたくしはこの高地の
頑強に浸食に抵抗したその形跡から

古い地質図の古生界に疑をもってゐた

賢治が種山（物見山のこと）の頂上に露出している「巨きな二つの露岩」の一つにハンマーを打ちつけたところ、その岩石は「閃緑玢岩」であった。その理由を「角閃石斜長石　暗い石基と斑晶」が観察されたからであるとしている。この閃緑玢岩の描写は、賢治が短歌「種山ヶ原　七首」に詠んだ「黒雲立つとまがひしは黒玢岩（メラフィフィアー）の露頭」との関連を感じさせる。というのも、短歌「種山ヶ原　七首」は、「大正六年七月より」に収められていることから、大正六年八月、江刺郡地質調査をおこなったときの作品で、賢治は盛岡高等農林学校の同級生二人とともに、初めて種山ヶ原へ登っている。「黒雲立つとまがひし」という表現は、そのときの天候の悪さが想像され、詩「種山ヶ原」のその後の詩句と対照させてみると、興味深い一致が見られるのである。

そしてこの前江刺の方から登ったときは
雲が深くて草穂は高く
牧路は風の通った痕と
あるかないかにもつれてゐて
あの傾斜儀の青い磁針は
幾度もぐらぐら方位を変へた
今日こそはこのよく拭はれた朝ぞらの下
その玢岩の大きな突起の上に立ち
……赤いすいばとひとの影
なだらかな準平原や河谷に澱む暗い霧
北はけはしいあの死火山の浅葱まで
天に接する陸の波
イーハトヴ県を展望する
いま姥石の放牧地が
緑青いろの雲の影から生れ出る

「そしてこの前江刺の方から登ったとき」が、いつの時を指しているのか、確かなことは分からないが、状況的には、大正六年八月、江刺郡地質調査をおこなったときを指している可能性が高い。つまり、詩「種山ヶ原」は、二回目の種山ヶ原行きかもしれないのである。詩「種山ヶ原」の日付「一九二五」は大正でいうなら一四年である。大正六年が一回目で、大正一四年が二回目ではないかと私は考えている。その間、賢

治は種山ヶ原に行っていないのか。行っていると考えるほうが自然かもしれない。ただ、もし大正一四年が二回目でなく、三回目か四回目だとするなら、物見山（種山）の山頂の露頭は、その段階で詳しく調査されていたはずではないのか。大正六年八月の一回目は天候不順のため、岩石の詳しい調査まで至らなかった。「黒玢岩（メラフィライアー）」という判断は、露頭をハンマーで叩いた結果ではないように思う。もし露頭をハンマーで叩いたなら、「角閃石」の存在を確認した段階で、「黒玢岩（メラフィライアー）」である可能性がなくなるからである。角閃石は、玢岩や安山岩といった中性岩に特徴的な鉱物なのである。さらに、詩「種山ヶ原」に表現された「わたくしはこの巨大な地殻の冷え堅まった動脈に／槌を加へて検べやう／おゝ角閃石斜長石　暗い石基と斑晶と／まさしく閃緑玢岩である」といった高揚感は、物見山（種山）山頂の露頭へのハンマーを用いた観察が、初めてのことであることを窺わせるのである。そして賢治は、その観察結果から、「わたくしはこの高地の／頑強に浸食に抵抗したその形跡から／古い地質図の古生界に疑をもってゐた」と、地質学者としての自説を述べるのである。

加藤碩一は、『種山ヶ原　地質と地形（準平原・残丘）』（加藤禎一・青木正博・長森英明・澤田結基、産業技術総合研究所地質調査総合センター、２０１１）において、物見山（**写真①**）の頂上付近にある露頭（**写真②**）を、「「物見山」「閃緑玢岩」の露頭」と地質学の専門家の立場から解説を加えている。また、「『古い地質図』とは、1／20万地質図幅『釜石』に相当します（**写真③**）。賢治は、地質図の物見山付近にあるはずの閃緑ヒン岩が記載されていないので、『古生界に疑問をもってゐた』と述べています」と説明している。

ところが、問題なのは、少なくとも、加藤の指摘する物見山（種山）露頭は、閃緑玢岩ではないのである。では何かといえば、凝灰岩である。賢治は「巨きな二つの露岩」といっているので、それはおそらく、加藤が写真で示す鋭角な二つの露頭であると思われる。他にも頂上付近には幾つも大きな露頭はあるが（**写真A～C**）、「巨きな二つの露岩」という表現には当てはまらないようだ。どちらにしろ、頂上付近のどの露頭もすべて凝灰岩であり、閃緑玢岩ではない。賢治のいう「角閃石斜長石　暗い石基と斑晶」が見いだせない

のである。凝灰岩には緑系（**写真D**）と赤系（**写真E**）があり、「巨きな二つの露岩」（**写真F**）は赤系の凝灰岩から成っている。鑑定は考古石材研究所の柴田徹氏によるもので、プレパラートを作成し偏光顕微鏡を用い観察した結果である。偏光顕微鏡写真（**写真G**）は、凝灰岩（赤系）のもので、１００倍直交ニコルである。

加藤が解説しているように、物見山（種山）を含むこの付近一帯は、秩父古生層（当時）と呼ばれる堆積地層である。賢治としては、そこに中生代の形成と推定される貫入岩としての何かを推定していたようで、その疑問が、ハンマーで露頭を叩くことにより解けたわけである。閃緑玢岩であることが確認され、秩父古生層を下から貫く中生代の閃緑玢岩の岩脈の存在を賢治は確信し、準平原の残丘として、風化に耐え、溶け残った結果と考えたのである。

現在、秩父古生層は古生代の成立ではなく中生代の成立と考えられているので、秩父層と呼ぶことになっている。加藤も当然その点は押さえていることだが、物見山（種山）を成立させている秩父層は、私が沢などでの採取調査した結果では、①砂質凝灰岩、②粘板岩、③粘板岩化した多孔質安山岩、④粘板岩化した凝灰岩、⑤粘板岩化した凝灰岩（④より細粒）、⑥緑色化した安山岩、⑦緑色化し粘板岩化した安山岩、⑧石英脈、⑨石灰岩（大理石の部分有り）等から成ることが確認できた（岩石鑑定は考古石材研究所の柴田徹氏による）。

１－４　物見山層

ここで、賢治の推定が、戦後の詳細な地質調査結果とも矛盾していることを、明らかにしておきたい。「工業技術院地質調査所」が昭和二九年に発行した、「５萬分の１地質図幅説明書　人首（秋田―第43号）」での記述と「５萬分の１地質図幅　人首（秋田―第43号）」（**図１**）を紹介する。著者は、通商産業技官・広川治、同じく通商産業技官・吉田尚の二名である。

Ⅱ．２．１．２　物見山層

本図幅中央部、宮守超塩基性岩体の南方に広く分布する。下部二畳紀戸中居と上部二畳紀登米粘板岩層の分布区域の間にはさまれて分布し、両者

との関係は明瞭でないが、断層によって両者と境するものと考えられる。化石を発見しなかったので、本層の年代はわからない。本層は火山砕屑岩を主とし、時には熔岩をはさむ特異な地層であり、そのほか凝灰質粘板岩・砂岩，または黒色粘板岩を処々にはさみ、また、見かけ上最上部に近いところにはレンズ状に礫岩をはさむ。

地層の見かけ上、下部(西部)はおおむね酸性火山砕屑物に富み、灰白色凝灰岩・灰白色凝炭質粘板岩または砂岩が発達し、剥理面がいちじるしく、非常に平たくうすくはげる特徴がある。各岩石には浮石状の最大２cm以下の白い斑点を含む部分があるが、変質をうけているので浮石かどうか不明である。これらの岩層の上位は淡白緑色の輝緑凝灰岩質のものを主とする岩相からなっている。物見山附近では、安山岩質熔岩起原と思われる岩石が処々に分布している。さらに見かけ上、上位にいくにしたがって緑色をまし、黄緑色ないし深緑色を呈する。この輝緑凝灰岩の中には、緑色、白色、紫色の小さい角線状の斑点を含む赤紫色を呈するものがある。そのほか、濃緑色ないし暗紫色の凝灰角礫岩および集塊岩・淡緑褐色砂岩・黒色粘板岩・淡緑色珪質岩がはさまれる、これらの岩石は下部のようにいちじるしい片理はもたず、塊状である。これらの輝緑凝灰岩は下伊手層あるいは米里層中の輝緑凝灰岩に比べると、花崗岩の影響がないためもあって，肉眼でも鏡下でもかなり新鮮な見かけを呈している。さらに最上位に近い部分、すなわち日詰―気仙沼構造線に近いところでは、処々にレンズ状の礫岩層が発達する。礫の種類は珪岩・粘板岩、まれに花崗岩および安山岩質岩石であり、最大20cm、通2-5cmのよく洗磨をうけたものが多く、また形は平になっている。膠粘物質は凝灰質砂岩である。

物見山層の分布区域は隆起準平原面を形成して、きわめて露出が悪いために、真の層厚・構造などを明らかにすることが困難であるが、見かけ上層厚は約２，５００-３，０００m、およその走向は、分布区域の北部ではN15～25°Wで、60～70°Eに傾斜し，中央部附近ではN-S方向、南方ではゆるく噂曲してN5～15°Eとなる。(―略―)

この記述からも分かるように、物見山（種山）には、閃緑玢岩のような貫入岩は存在していないのである。

また、**図1**・図幅によればに、貫入岩が全く存在していないというわけではなく、散在している状態である。私が確認したのは、物見山（種山）の北西部の谷間、小友川が浸食した外山地区に比較的広範囲の閃緑玢岩の露出地帯においてである。**写真H**がそこで採取した閃緑玢岩である。はっきりと角閃石や斜長石が確認でき、暗緑色の潜晶質の石基をもつ。偏光顕微鏡写真（**写真I**）の茶色の部分が角閃石である。賢治の希望的推測にしたがえば、この外山地区が物見山（種山）の残丘として、頂点を形成していればよいのである。しかし、実際は川の浸食作用により、谷間を形成しているのは皮肉なことである。

賢治はなぜ岩石名を違えたのか。頂上や頂上付近で採取できる岩石は、すべて凝灰岩である。可能性をいえば、頂上付近ではないが、少し下がると、変質安山岩の露頭が諸所にあり、それらを見た場合、閃緑玢岩と判断してしまう可能性がないわけではない。**写真J**がそれで、暗緑色の石基に黒い斑晶が見え、専門家の意見では、賢治がこの変質安山岩を閃緑玢岩と判断することは、十分あり得るとのことである。

「口語詩稿」に収められている「〔高原の空線もなだらに暗く〕」を見てみよう。

高原の空線もなだらに暗く
乳房のかたちの種山は
濁った水いろのそらにうかんで
みちもなかばに暮れてしまった
（―略―）

ここでも種山が詠われている。岩石の表現としては、

凸こつとして苔生えた
あの　玢岩の　残（モナドノック）　丘
そのいたゞきはいくたびふるひ
海よりもさびしく暮れる

とあり、種山を玢岩として認識している。この詩は種山を遠くから眺（モナドノック）めており、「凸こつとして苔生えた／あの玢岩の　残　丘」という、過去の記憶が書き込

まれていることから判断するに、詩「種山ヶ原」よりも後の作品と見ることができるだろう。すでに触れたが、賢治は玢岩と黒玢岩（メラフィライアー）とを区別していたと推定されるので、ここでの玢岩は閃緑玢岩と考えて間違いないだろう。

加藤の指摘するように、賢治は「古い地質図」を前提に「古生界に疑問をもってゐた」と表現したのである。その「古い地質図」、すなわち明治三六年に作成された「1／20万地質図幅『釜石』」を発見・紹介した加藤の功績は大きいといえるだろう。それを見てみると、物見山の東南に、栗木の表示がみえ、薄茶に彩色され、岩種を示す「P」を確認することができる。これは、地図の「設色記号」によれば、「玢岩」を意味する「Porphyrite」か、「斑岩」を意味する「porphyry」のどちらかということになる。地図では茶色の濃い薄いで区別されているため、微妙でどちらとも判じ難いが、「玢岩」であっても「斑岩」であっても、岩石の形成の仕方は同じであり、「旧火山」として、賢治は興味を持ったのではないだろうか。もし、この地図に従えば、「玢岩」または「斑岩」が、栗木にはあるが物見山にはないということを知るはずで、賢治の疑問自体が宙に浮くことになる。栗木はどちらかといえば谷間であり、「玢岩」、「斑岩」＝「残丘」の図式が成り立っていないのである。私が調査した「外山」も谷間であり、「玢岩」だからといって風化に耐えているわけではなかった。川の浸食力の前には、やはり削られてしまうのである。

余談になるが、私は「古い地質図」の存在に刺激を受け、岩手大学に問い合わせたところ、明治時代に作成された地形図や地質図が複数保管されていることを知った。それらを調査するなかで、「釜石」版には、「KAMAISHI」と表記される英語表記版「KAMAISHI」1／20万地質図幅（明36・4）の存在することを知った（**図2-1**）。こちらの方が明瞭に読み取れるので、参考までに紹介する。「P」の記号は、「設色記号」により「玢岩」を意味する「Porphyrite」であることが確認できる。

「釜石」または「KAMAISHI」を賢治が見ていたかどうか。盛岡高等農林学校図書館の朱印が押されているので（**図2-2**）、見ていた可能性は高いのではないだろうか。補足だが、「栗木」地区の「玢岩」は調査ミスのようで、その付近は古生代・二畳紀の頁岩の露出

している地帯である。

私は、大正六年の短歌に見いだせる黒玢岩（メラフイライアー）と、大正一四年の詩「種山ヶ原」に見いだせる閃緑玢岩とは、同じ岩石を指していると解釈しているので、賢治がどうして、短歌において黒玢岩（メラフイライアー）と表現し、詩において閃緑玢岩と表現したのかが、腑に落ちないでいる。冒頭指摘したように、童話で蛇紋岩と表現されていることも含めると、賢治における〈種山ヶ原〉は、短歌では、蛇紋岩と「黒玢岩（メラフイライアー）」、詩では「閃緑玢岩」、童話では「蛇紋岩」といったばらばらな岩石認識ということになる。

作品の成立時期との関係から考えてみる。短歌は大正六年、詩は大正一四年ということがはっきりとしている。童話はどうかというと、未発表で日付もないので正確なことはいえないが、使用原稿用紙などから小沢俊郎は「宮沢賢治必携」（別冊国文学№6）で、大正一〇年頃かと推定している。小沢の推定を取り込み、並び替えると、短歌が大正六年、童話が大正一〇年、詩が大正一一年と大正一四年ということになる。それぞれ改稿などがあるので、年月を固定して考えることに無理はあるが、一応、黒玢岩（メラフイライアー）→蛇紋岩→閃緑玢岩という流れを想定することができる。

1－5　再び黒玢岩（メラフイライアー）

では、〈種山ヶ原〉の岩石認識は、閃緑玢岩が最終的なものだったということで決着がつけられるかといえばそうではない。賢治は晩年、口語詩の文語詩化を試みていたことは、よく知られていることだが、「文語詩未定稿」にある「〔しののめ春の鴇の火を〕」という作品に、種山ヶ原が読み込まれている。

しののめ春の鴇の火を
アルペン農の汗に燃し
縄と菩提樹皮にうちよそひ
風とひかりにちかひせり
　四月は風のかぐはしく
　雲かげ原を超えくれば
　雪融けの　草をわたる
黒玢岩（メラフイライアー）の高原に
生しののめの火を燃せり

後半部分は略したが、この文語詩はとても複雑な成立過程をもっている。詳しくは『新校本宮沢賢治全集』第七巻の解説に譲るとして、ここで問題としたいのは、晩年時になっても「黒玢岩（メラフィライアー）の高原」という認識を放棄していないという事実である。なぜ、「玢岩の高原」ではいけないのか。改稿の流れを遡れば、最初期の、短歌「種山ヶ原」にたどり着く。大正六年、賢治二一歳の折の表現が、晩年まで持ち越されてきているわけである。

賢治にとって〈種山ヶ原〉の岩石認識は、黒玢岩（メラフィライアー）であり、蛇紋岩であり、時には閃緑玢岩である、という地学的には理解することの不能なきわめて特異な場所であった、ということになる。また、私の調査では、〈種山ヶ原〉を象徴する物見山（種山）頂上の残丘（モナドノック）を成す岩石は、それらのどれでもない、あずき色や緑色がかった凝灰岩の硬い塊であった。

それにしても、賢治は〈種山ヶ原〉に何回登ったのだろう。テクスト上の〈種山ヶ原〉の出現頻度は高いが、確認できたのは二度だけで、この落差に、賢治文学における地学的想像力を考えるヒントがあるのかもしれない。賢治文学と地学との関わりは、虚虚実実とみるべきだろう、むしろ、それだからこそ、賢治はイーハトーブというユートピアを描き出せたのかもしれない。

第2章　〈鬼越山〉を巡って

2－1　鬼越山＝鬼古里山

『雨ニモマケズ手帳』に、「経埋ムベキ山」を記した頁があり、旧天王から始まり沼森まで三十二の山の名を読み取ることができる。その中の一つに、「鬼越山」という山の名がある。小倉豊文著『「雨ニモマケズ手帳」新考』（東京創元社、昭53）によれば、

⑳「鬼越山」、「オニゴリヤマ」。岩手山の東南麓、小岩井農場の西北方、滝沢村姥屋敷から盛岡市に降る街道に「鬼越坂」があり、その北方に四四四メートルの「鬼古里山」がある。江戸時代には「鬼越山」とかいた。その西南麓に鬼越という部落がある。オンゴシというアイヌ語が語原ともいう。

とされ、鬼古里山（**写真K**）を鬼越山に当てている。原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍、平11）でも、小倉豊文説を踏まえて、次のように説明されている。

鬼越山【地】　おにこしやま、とも（アイヌ語のオニンコシュ＝「すべる場所」に由来）。現在は鬼古里山と表記。岩手山の東南、沼森の南約二㎞、小岩井農場の東北に位置する小山。高さ四四四ｍ。この辺りは賢治がよく玉髄を拾いに行った場所である。帳［雨ニモマケズ］の「経埋ムベキ山」の一。歌［明四二、四］に「鬼越の山の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ来りぬ」がある。この瑪瑙は板谷栄城の推測によれば玉髄のこと。両者はごく近い石の仲間である。詩［〔友だちと　鬼越やまに〕］には「友だちと／鬼越やまに／赤銹びし仏頂石のかけらを／拾ひてあれば／雲垂れし火山の紺の裾野より／沃土の匂しるく流るゝ」がある。童「狼森と笊森、盗人森」で農民たちが山越えして開拓にやってくる、その「東の稜ばった燧石の山」は、鬼古里山のすぐ南にある燧堀山（高さ四六七ｍ）で、かつて発火のための火打石をこの山から採掘したと言う。この両山の間を姥屋敷（→狼森、笊森、盗森、黒坂森）から盛岡方面への道が通り、鬼越坂と呼ばれていた。鬼越の名は詩［小岩井農場］下書稿にも登場。文語詩［車中］（初行「稜堀山の巌の稜」）に見える「稜堀山」も燧堀山のことであろう。

鬼越山＝鬼古里山という解釈において、原の解釈は小倉の解釈と同じとみてよい。ただ、原の記述には混乱がある。短歌「鬼越の山の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ来りぬ」の「鬼越の山」に対し基本的定義が成されていないため、賢治が「瑪瑙のかけら」を拾ったのが、鬼古里山でのことなのか、燧堀山でのことなのか、区別が明確でないということである。「瑪瑙のかけら」が鬼古里山でも燧堀山でも採取できるなら区別が曖昧でも大きな問題は生じないが、「瑪瑙のかけら」を鬼古里山で拾うことはできないのである。

他の事典類ではどう記述されているだろうか。渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』（勉誠社、平19）では、「鬼越　おにこし」という項が立てられ、次のように説明

されている。

滝沢村沼森の南、燧堀山の北の地。盛岡から姥屋敷にぬける時ここを通る。宮沢賢治の明治四十二年（一九〇九）四月の歌に「鬼越の山の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ来りぬ」がある。〔友だちと鬼越やまに〕では「友だちと／鬼越やまに／赤銹びし仏頂石のかけらを／拾ひてあれば／雲垂れし火山の裾野より／沃土の匂しるく流るゝ」とよんでいる。以前は、おにこり、おにごりなどと呼んだようだ。（渡部芳紀）

ここで説明されているのは、「鬼越」という地区名であって、「鬼越の山」や「鬼越やま」ではない。「鬼越の山」や「鬼越やま」の語を含む短歌作品を引用しているにもかかわらず、その山がどこにあるのか、全く説明がなされていない。また、小倉や原が主張する、鬼越山＝鬼古里山説を、渡部が支持しているか否かも分からないままである。末尾に、「以前は、おにこり、おにごりなどと呼んだようだ」と記しているが、山に関する情報ではない。

天沢退二郎・金子務・鈴木貞美編集『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、平22）を見てみたが、「鬼越」も「鬼越山」も立項されていなかった。

私の疑問の基本は、賢治の存命中、すなわち、明治・大正・昭和のどの地図にも、「鬼越山」が存在していないことである。「鬼越」という地区名や、「鬼越坂」という地名は確かに存在しているが「鬼越山」は存在していない。存在するのは一貫して「鬼古里山」である。賢治自身が一度も「鬼古里山」の名を記述していないにも関わらず、「鬼越山」＝「鬼古里山」と判断されているのはなぜか。小倉が指摘する「江戸時代には『鬼越山』とかいた」という根拠だけで、決定することに無理はないのだろうか、大いに疑問だと考えている。「江戸時代には『鬼越山』とかいた」という根拠だが、私も、滝沢村役場に問い合わせ確認したが、事実そのような例があるということであった。だが、逆にいえば、明治以降「鬼古里山」を「鬼越山」と表記した例は見いだせないのは不自然ではないか、という疑問が残る。「鬼越山」というのは賢治独自の命名だったのでははないか、このような仮説から考察を始めていきたいと考える。

鬼越山に関しては、拙著『宮沢賢治文学における地学的想像力－〈心象〉と〈現実〉との谷をわたる－』（蒼丘書林、平23）の第二章「宝石・飾石商の夢」で、かなり突っ込んで論じたことがある。しかしその後、私自身の調査研究も進み、多少自説の修正の必要を認めているので、この機に論じ直しておきたい。

2－2　鬼古里山の実体

拙著（同前）において、小川達雄著『隣に居た天才盛岡中学生宮沢賢治』（河出書房新社、平17）を引用し、「鬼越山」＝「鬼古里山」という判断から生ずる問題点を挙げておいた。以下は、拙著からの引用である。

小川達雄の考察に対する疑問は、「鬼越山」を鬼古里山と捉えている点にある。小川は「鬼越の山とは、その背後に控えた鬼古里山のことである」と断定し、燧堀山に関してはその存在を記すにとどめている。（―略―）

小川達雄は次のようにも記している。「わたしはある時、鉱物の専門家・及川昭四郎君先導のもと、鬼越山でこの瑪瑙探しを試みたが、結局発見できたのは瑪瑙以前の玉髄のみであった。実際にはその『かけら』を拾うこともむずかしい」。氏が登った「鬼越山」は、おそらく鬼古里山であるはずだ。現在の地質図上は鬼古里山も燧堀山同様、飯岡層（第三紀）から成るとされるが、玉髄の出る可能性のある飯岡層は、鬼古里山の地表面からはまったく確認することができない。

理由の第一は、地表面が厚く腐植土に覆われて掛り、岩石の露頭を見出すことができない点にある。岩石が採取できなければ玉髄を含むかどうかも判断のしようがない。

理由の第二として、鬼古里山の在る鬼越峠の岩手山側には、過去の岩手山の活動による火山岩屑（第四紀）の流れ山が各所にあり、童話「狼森と笊森、盗森」に登場する狼森（三八〇ｍ）が岩屑なだれによる流れ山であるように、鬼古里山も岩手山の岩屑なだれの影響を考慮しなければならない。

私が拙著の訂正の必要を感じているのは、三箇所である。

まず一箇所目だが、「現在の地質図上は鬼古里山も燧堀山同様、飯岡層(第三紀)から成るとされるが、玉髄の出る可能性のある飯岡層は、鬼古里山の地表面からはまったく確認することができない」と記述した点である。確かに、どの地質図を見ても鬼古里山は、燧堀山同様、飯岡層(第三紀)から成るとされているのである。しかし、拙著を刊行した後の私の新たな鬼古里山の調査によれば、鬼古里山は、新生代第三紀ではなく、第四紀の形成であった。第三紀ではなく第四紀であることにどのような意味があるかといえば、第三紀に形成した燧堀山は、瑪瑙・玉随を産出する可能性を有しているが、第四紀に形成した鬼古里山には、その可能性が全くないということである。つまり、鬼古里山のどこをどう探しても、瑪瑙や玉随は出てこないのである。そして重要なことは、そのような鬼古里山に、賢治が幾度も瑪瑙・玉随探しに行くはずがないということである。

現在市販されている地質図は戦後の作成である。賢治が盛岡高等農林二年在学中に仲間と共同で作成した「盛岡附近地質図」及び「盛岡附近地質調査報文」では、燧堀山は「水成岩」の「第三紀層」に属し、鬼古里山は「新火山岩」の「石英安山岩」に属すとされている。燧堀山がなぜ「水成岩」なのかというと、成因が海底での噴火によるからである。それが隆起し今のような山の状態になっているのである。噴火の時期は、新生代・新第三紀・中新世（約一七〇〇万年前頃～一五〇〇万年ほどの期間）と考えられる。一方、「新火山岩」というのは、新生代に入ってから陸上で噴火した火山を指し、中生代以前に噴火した「旧火山」と区別される。花崗岩や閃緑岩、橄欖岩、蛇紋岩などは、地中内部で固まったものとして「深造岩」として区分される。

では、鬼古里山はいつ地上に噴火したのか。この問に答えるためには、絶対年代を測定するしかない。結果だけ述べれば二十三万年（誤差±一〇万年）である。新生代・第四紀・洪積世（更新世とも）で、とても若い火山だということが分かる。岩手山とほぼ同年齢くらいと考えれば分かりやすい。この結果は、蒜山地質年代学研究所によって測定されたもので、K-Ar法が用いられた。誤差値が大きいのは、新しい岩石の場合

やむを得ないということである。

結論を確認すれば、鬼古里山と燧堀山は、成因も形成時期もまったく異なる山で、市販の地質図に示される飯岡層(第三紀)という分類は、燧堀山に当てはまっても、鬼古里山には当てはまらないこと、また、宮沢賢治自身、燧堀山と鬼古里山の成因の違いを知っていた、ということである。

燧堀山から瑪瑙や玉随が産するのは、海底での噴火の際、破砕し堆積した火山岩の隙間に、マグマの高温高圧の水蒸気が通過し、冷却する過程で二酸化硅素分が析出され、形成されるのである。したがって、地上噴火のマグマである鬼古里山は、瑪瑙や玉随を産することができないのである。

では、なぜ、このような事実がこれまで専門家の間で理解されずにいたのか。広い範囲を扱う地質図の場合、山の一つ一つを調査することはしなかったのではないだろうか。かりに調査したとしても、鬼古里山から、岩石を見つけ出すことは困難だったはずである。

この問題は、拙著で「理由の第一」に挙げた、「地表面が厚く腐植土に覆われて掛り、岩石の露頭を見出すことができない」という点が調査の壁となっている。私は、二度目には、一メートルもある金属製の槍のような道具をもって山に入ったが、それを地表に突き入れても、地表面に届かず、岩石に当たることもなかったのである。

「理由の第二」に挙げた「岩屑なだれ」の問題もやっかいである。「鬼古里山の在る鬼越峠の岩手山側には、過去の岩手山の活動による火山岩屑(第四紀)の流れ山が各所にあり、童話「狼森と笊森、盗森」に登場する狼森(三八〇m)が岩屑なだれによる流れ山であるように、鬼古里山も岩手山の岩屑なだれの影響を考慮しなければならない」からである。たとえ岩石が見つかったとしても、それが鬼古里山本来の岩石なのか、岩手山から押し流され運ばれてきた岩石なのか、区別がつかなくてはまずいのである。私の経験では、ようやく探し当てた岩石も、まわりの土を掻き出すとぽろりと地中から転げ落ちるような状態で、割ってみてもたいがい岩手山の岩石と区別がつかない岩石ばかりであった。

鬼古里山の場合、低い山（四四四メートル、現在の国土地理院の地形図では四三八メートル）とはいえ、登山道がなく、藪こぎ状態となる。さらに、頂上付近

に辿り着いても、全く岩石の露頭が見当たらないのである。私は、何度目かの挑戦の末、偶然三角点を見つけ、そこから周囲を見渡したとき、水の流れた跡のような一筋が目に入ったのである。その筋を数メートル下っていったところ、ついに、鬼古里本来の岩石露頭を確認することができた。

早速、露頭の岩石（**写真L**）を叩いたところ、きわめて硬い手応えであった。素人の私が見てもすぐに岩手山の安山岩と異なる緻密な断面（**写真M**）であった。なお、参考までに鬼古里山・安山岩の偏光顕微鏡写真（**写真N**）と燧堀山・安山岩（**写真O**）、及び燧堀山産出の玉随（**写真P**）を掲げておく。

2―3　鬼越山＝燧堀山

さて、実在する鬼古里山と燧堀山について、岩石の種類や形成時期などの確認作業はここまでとし、つぎは、実在しない「鬼越山」「鬼越のやま」に関し、『新校本宮沢賢治全集』別巻の索引をたよりに、使用例を調査し、その指し示すところを見極めていきたい。分かりやすいように、「鬼越山」「鬼越のやま」をゴシックの太字で示しておく。

第一巻（短歌・短唱）【本文篇】〔明治四十二年四月より〕011「**鬼越の山**の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ来りぬ」

第一巻（短歌・短唱）【校異篇】大正四年四月［燧堀やま→友だちと］／**鬼越やま**に／赤銹し／仏頂石の／かけら［など→を］／拾ひてあれば」

第七巻（詩［Ⅵ］）【校異篇】車中〔二〕（1）下書き稿（一）「**鬼越山**の尖れる稜／車窓かすかに過ぎ行けば」。（2）下書き稿（二）「［**鬼越**→燧『堀→石→堀』］山［巌の稜→剛→巌の稜］／一木を宙にうかぶれば」

第十三巻（〈上〉覚え書き・手帳）【本文篇】『雨ニモマケズ手帳』一四三頁・一四四頁「**鬼越山**」

第十三巻（〈下〉ノート・メモ）【本文篇】『文語詩篇ノート』表表紙裏「**鬼越山**　中村ふじ夫、長浜、牛の群れ、青き野」

第十四巻（雑纂）【本文篇】『盛岡附近地質調査報文』（二）第三紀層　○流紋質凝灰岩「図幅の西北**鬼越山**以北に稍広く分布し金沢、影添於て好露

出を見る」

第一巻では、【本文篇】と【校異篇】の短歌に、二例確認できる。〔明治四十二年四月より〕の例は、それだけでは場所を確実には特定できないが、谷川で瑪瑙のかけらを拾ったという表現から推定するならば、燧堀山のことと考えられるだろう。「大正四年四月」の例は、「燧堀やま」を「鬼越やま」と書き直していることが明らかなので、この例では、燧堀山＝鬼越山が確定する。

第七巻【校異篇】の詩、車中〔二〕の例もはっきりしている。下書き稿(二)の「〔鬼越→燧『堀→石→堀』〕」は、「鬼越山」を「燧石山」に直し、さらに「燧堀山」に直そうとしたのである。燧石山は「ひうちいし山」と読み、燧堀山は「かどほり山」と読むのがふさわしいだろう。同じ山の名だが、賢治は語感を大切にしたのかも知れない。

第十三巻〈上〉【本文篇】の『雨ニモマケズ手帳』の「鬼越山」は、経埋ムベキ山の例なので、ここでは問わない。

第十三巻〈下〉【本文篇】『文語詩篇ノート』の「鬼越山」だが、「中村ふじ夫、長浜、牛の群れ、青き野」とメモが続いており、賢治は中村、長浜と一緒に、盛岡方面から鬼越坂を上がり「燧堀山」での玉随採取を経て、広々とした小岩井農場側に出た、と読めるだろう。ただ、鬼古里山に行き、周辺の広々とした野や小岩井農場などを散策した、とも読めなくもない。

第十四巻（雑纂）【本文篇】『盛岡附近地質調査報文』の「鬼越山」だが、これは少し難題である。「図幅」とは『盛岡附近地質図』のことを指す。その図幅の西北には、燧堀山と鬼古里山の両方が記載されている。音の響きだけ考えると、ここでの鬼越山は鬼古里山のことかと推定されるが、文脈を考慮に入れると、鬼越山＝鬼古里山では不自然な点の生ずることが分かる。というのも、「鬼越山」が「第三紀層」の項で扱われていることがポイントとなる。賢治にとって、鬼越山が鬼古里山であったとするなら、「新火山」の項で扱っているはずである。まして、「流紋（岩）質凝灰岩」を記述しているのだから、それは、「新火山」ではなく、水成岩として扱われている「第三紀層」のどこかでなくてはならない。「金沢」、「影添」という地名が記されているがおそらくそこも「第三紀層」

であるはずだ。「金沢」、「影添」の場所が特定できればよいのだが、金沢に関しては滝沢村鵜飼地区にある沢の名であると思われる。とするならば、そこに「鬼越山以北」という条件を当てはめるなら、金沢は必ずしも鬼古里山の北にはならず、むしろ西の方に当たるといえるだろう。燧堀山からみた場合、金沢は北から流れだす位置関係となる。したがって鬼越山＝鬼古里山とは断定できず、むしろ、鬼越山＝燧堀山を示す可能性が高いと考えられる。「影添」だが、確認はできていない。

これで、ほぼ、「鬼越山」「鬼越やま」の使用例として、燧堀山を意味していたということが実証できたと考える。他に、「鬼越」、「鬼越坂」の使用例があり、それらの確認も必要かと思うので、以下に示す。

第二巻（詩［Ⅰ］）【本文篇】「〔小岩井農場　第五綴　第六綴〕」「**鬼越**を越えて盛岡に出やうかな。」

第二巻（詩［Ⅰ］）【校異篇】「小岩井農場」〔「パート七〕対応箇所〕「**鬼越**へ抜ける道をたづねて見やう」

第十三巻（上覚え書き・手帳）【本文篇】『御大典記念手帳』三頁「明治四三年　中学一／二年　一四才　山県舎監　酒買ヒ　**鬼越**」。

第十三巻（〈下〉ノート・メモ）【本文篇】『「東京」ノート』六八頁「盛中一年　一学キ長浜ト**鬼越**ニ行ク」。七〇頁「農林一年　〔東〕**鬼越**」。四二頁「和歌年月索引　中学一年　第一学期　中村**鬼越**」四五頁「農林第一年　第一学期　**鬼越**」

第十四巻（雑纂）【本文篇】『盛岡附近地質調査報文』（二）第三紀層　○安山岩質凝灰岩「図幅の西北部篠木坂及び**鬼越坂**付近に産す」。○半熔頁岩「高帽山**鬼越**及びその南の所々に産す」。○角礫岩「第三紀層の北部**鬼越**附近に於て小露出をなす」

どの使用例も、基本的に場所を表しており、山の名として使用されてはいないと判断される。

最後に、賢治以外の人の用いた例が一つ見出せた。

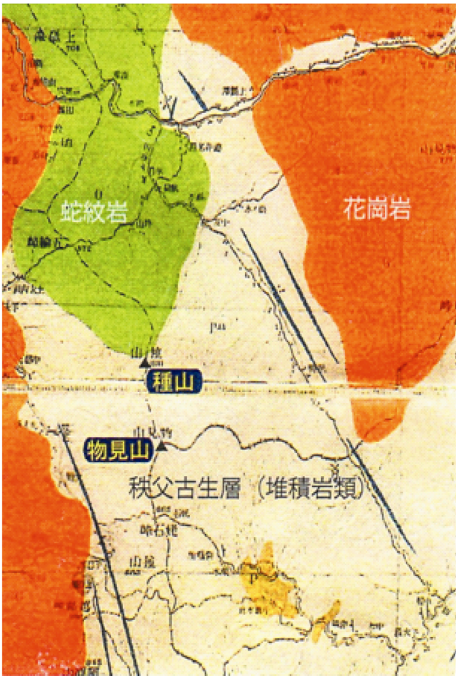
第十六巻（〈下〉補遺・資料）【年譜篇】で、盛岡高等農林で賢治と寮が一緒になった一級下の山中泰輔の思い出である。

私も宮沢さんと一緒に日曜日等には盛岡の西南にある南昌山の辺りや、**鬼越山**から小岩井農場を通って繋温泉当りをよく歩き廻った。亦、岩手山へも宮沢さんと登山した。

「賢治さんの思い出」（川原仁左ェ門編『宮沢賢治とその周辺』一二四頁）

賢治の友人たちが書き残した、山行きに関する共通した思い出は、賢治の鉱物採集好きであり、ハイキングのような山行きではなかったということである。上記の鬼越山もおそらくは燧堀山のことであったと推定される。鬼越山という呼び名が、賢治の命名でそれが友の言葉となったのか、それとも、そのような呼び名が当時一部にしろ存在していたのか明らかにすることができない。ただ、鬼越山は、鬼古里山のことでなく燧堀山（燧石山）のことであったことが明らかになれば、本稿の目的は達せられたといえると思う。

（了）



図③　明治 36 年（1903 年）に地質調査所が発行した
1/20 万地質図幅『釜石』の一部

図①　種山ヶ原と物見山

図②　「物見山」の閃緑ヒン岩露頭

『種山ヶ原　地質と地形（準平原・残丘）』

（加藤禎一、青木正博、長森英明、澤田結基(2011)イーハトーブの石たちー宮沢賢治の地的世界ー、地質調査総合センター研究資料集、no. 529 産業技術総合研究所地質調査総合センター）

写真Ａ　物見山 山頂の露岩

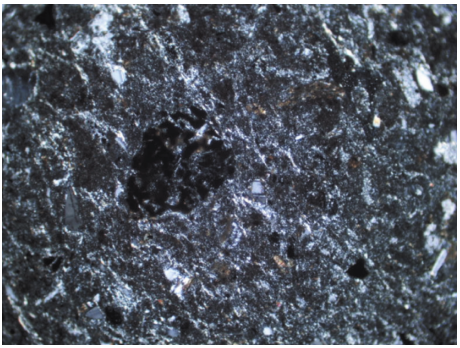
写真Ｂ　物見山 山頂の露岩

写真Ｃ　物見山 山頂の露岩

写真Ｄ　凝灰岩（緑系）

写真Ｅ　凝灰岩（赤系）

写真Ｆ　物見山 山頂付近「巨きな二つの露岩」



写真Ｇ　凝灰岩（赤系）の
100 倍直交ニコル

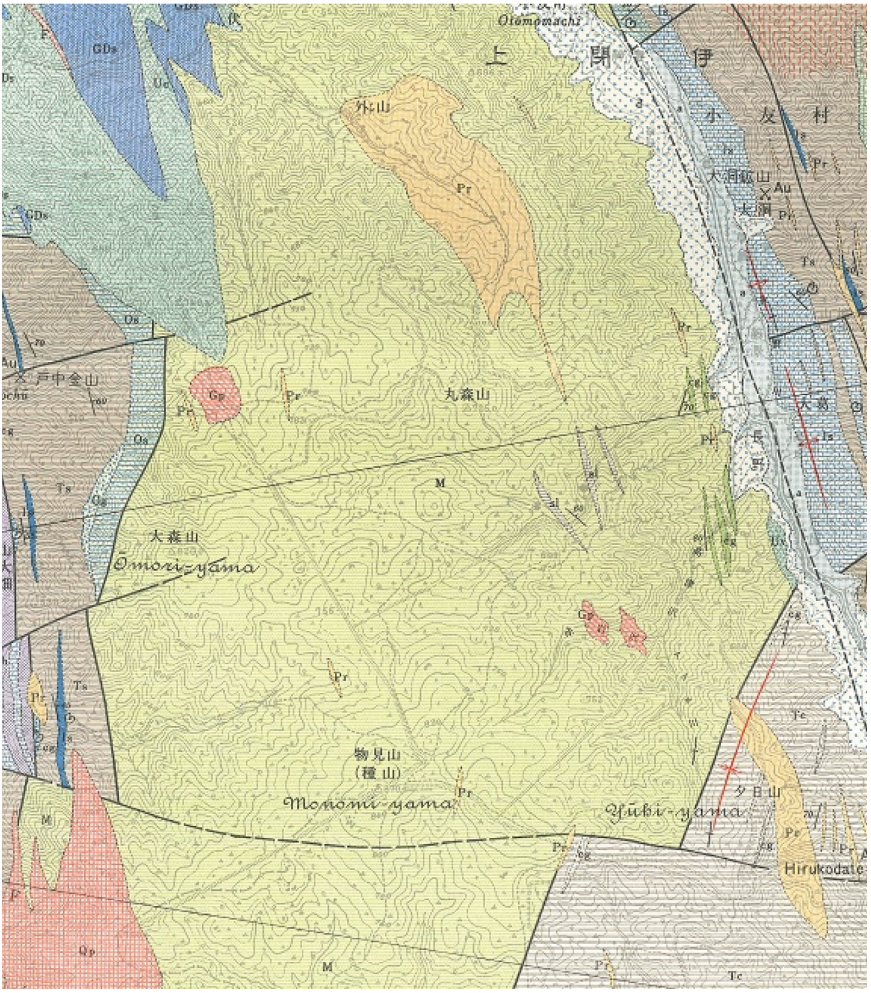
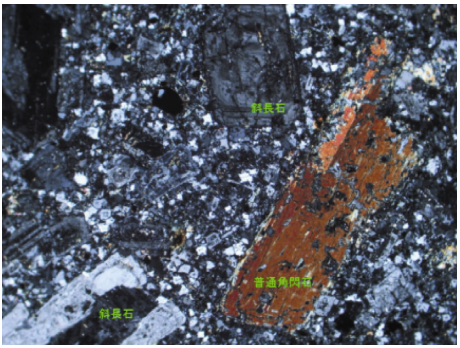


図１　「５萬分の１地質図幅　人首（秋田－第 43 号）」

写真Ｈ　閃緑玢岩



写真Ｉ　閃緑玢岩の 100 倍直交ニコル

写真Ｊ　変質安山岩

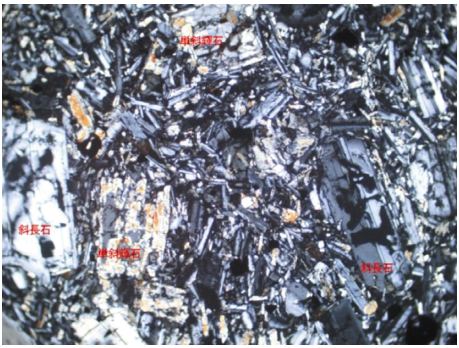
図２－１　英語表記 1/20 万地質図幅『釜石』（明 36・４）

図２－２

写真Ｋ　左・鬼古里山　右・燧堀山（共に鬼越地区）

写真Ｌ　鬼古里山 頂上付近の岩石露頭

写真Ｍ　鬼古里山・両輝石安山岩



写真Ｎ　両輝石安山岩（鬼古里山）
の 100 倍直交ニコル

写真Ｏ　燧堀山・輝石安山岩
（賢治は安山岩質凝灰岩と判断）

写真Ｐ　燧堀山産 玉随